

ブドウ「クイーンニーナ」の無核化には ストレプトマイシン処理が有効です

表1 「クイーンニーナ」におけるストレプトマイシン処理が無種子化率に及ぼす影響

処理区 ^z	無核化率 ^y (%)
ストレプトマイシン処理	100
無処理	97.2
有意性 ^x	*

^z両処理区とも、満開期にジベレリン25ppmにフルメット10ppmを加用して花房浸漬処理を実施

^y縦径 6 mm以上を種子とし、調査した果粒のうち種子が混入していない果粒の割合を算出

^x処理及び年次による二元配置分散分析により、
*は 5 %水準で有意差あり
(アークサイン変換後に検定)



図1 「クイーンニーナ」の種子の様子
(背景は 1 cm 方眼)

開発のねらい

「クイーンニーナ」は、満開期のジベレリンによる無核化・肥大処理だけでは種子が混入する場合があります。そこで、開花前のストレプトマイシン処理による無核化率の向上効果を明らかにしました。

新技術の概要

- ストレプトマイシン処理を行うと、無核化率は100%です。一方、処理を行わない場合には種子が混入することがあります（表1、図1）。
- ストレプトマイシン処理を行うと、処理を行わない場合に比べて果粒重及び果房重がやや小さい傾向があります。
- ストレプトマイシン処理を行っても、果皮色への影響は大きくありません。

活用場面

無核化を徹底することで、甘くて大粒の種なし「クイーンニーナ」を生産することができ、消費者からの信頼を得ることができます。